

玉ねぎ袋でぶら下がったマダコが産卵し、子供が生まれた

(イノベーション創出強化研究推進事業「30005A マダコ養殖の事業化に向けた基盤技術の開発」予算)

タコの産卵と言えばタコ壺を思い出します。天然では岩の隙間などを利用し、その天井などに房状の卵を産みつけるタコですが、タコ漁のひとつにタコ壺縄漁業があり、そのタコ壺にも房状の卵が産み付けられることから、人工でタコに卵を生ませる場合はタコ壺を使うのが一般的です。天然の岩穴にしろ、タコ壺にしろ、硬い壁面・天井があり、そこに卵が産み付けられます。ところが今回紹介するタコの産卵、子供（幼生）のふ化は、柔らかい網の中での話です。

香川県中讃地域の本島漁協でタコ壺縄漁業を営む方から、玉ねぎ袋に入れて水槽に吊るしておいたタコが袋の中で産卵し、タコの子供もうまくふ化したといった情報をいただきました。その方は食事を提供する店も開いており、その店の展示水槽内での出来事です。実際に玉ねぎ袋の中で卵を産み付けている親ダコも提供していただき、水産試験場の水槽でもうまく子供（幼生）が生まれることが分かりました。

タコ壺を使わずに、それも玉ねぎ袋に入れたままで産卵、幼生のふ化までが計画的にできれば、技術開発中のマダコ種苗の生産に必要な水槽も、コストも、手間暇も大きく削減できそうです。そこで、玉ねぎ袋での産卵、幼生のふ化を水産試験場の水槽で規模を大きくして再現してみることにしました。

令和2年9月17日に、高松市の東にある庵治漁協のタコ壺縄漁業者に、俗に言う「頭の張った蛸」（卵巣が発達していると思われるタコ）14個体を集めてもらい、おのおの口を絞った玉ねぎ袋に入れて、1 kLの透明水槽2槽に各7個体ずつ吊るしました。



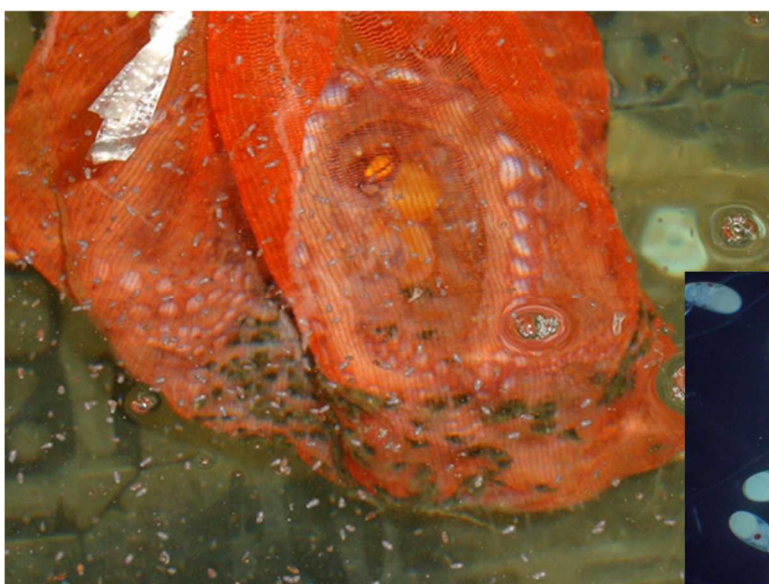
水槽内にぶら下げられた親ダコ

「頭の張ったタコ」

5日後の9月22日には最初の3個体が産卵を開始し、その後10月5日までの14日間に12個体が産卵を開始しました（1個体が産卵を終了するまでは数日を要します）。残る2個体は解剖すると雄であったので、入手したタコのうち雌は12個体あり、そのすべて（雌の100%）が産卵したことになります。最初のタコ幼生のふ化は10月16日、産卵が始まってから24日後のことで、ふ化した幼生は玉ねぎ袋の外にうまく抜け出て泳いでいました。ふ化が終わったのは11月18日で、ふ化開始から約1か月間、ほぼ毎日、合計44万個体がふ化しました。親ダコ1個体（平均体重945g）あたり、3万7千個体の幼生がふ化したことになります。ふ化したタコ幼生の約4万個体は種苗生産の実験に使い、残りの40万個体は水産試験場地先の海に放流しました。



玉ねぎ袋の内側に産み付けられた房状の卵



玉ねぎ袋の外に出て泳ぐタコの幼生
(白い点)

発眼した卵



ふ化した幼生



今後はこの方法：玉ねぎ袋に入れた親ダコを垂下し産卵、ふ化させる方法—を、種苗生産に使用するだけでなく、マダコ資源が増えるように海の上でも使えるような形に発展させられればと考えています。
(文責 榎野元秀)